

61才のおじさんを魅入らせる藤井聡太二冠

公益委員 北崎 浩詞

コロナ下で鬱屈した生活を余儀なくされている中で、明るい話題として私が注目していたのは藤井聡太という18歳の若者棋士の活躍であった。4年ちょっと前に14歳2カ月でプロデビューし、29連勝というとてつもない記録を作った後も数々の新記録をつくり、昨年の7、8月には棋聖、王位のタイトルを獲得し、ついに二冠保持者となった。昨夏はテレビのワイドショー等でも度々取り上げられ、一大ブームと化した。

ただ、彼は、若者や女性、年配者に限らず広く一般に受け入れられているが、高齢者のおじさん（博報堂研究員によると、おじさんとは43歳頃から69歳頃までをいう）にコアなファンがいるという事実にも注目したい。例えば、日本経済新聞は藤井二冠関連の記事を他紙に比して多く掲載している。還暦を1年過ぎた私自身、小学校時代から将棋に嵌っていたので、決して今でいう“観る将”ではないが、藤井二冠に関する書籍を集めたり、棋譜を並べたりと、その活躍ぶりを追っている。なぜ、私もいい年して彼の存在が気になるのか、彼のファンになっているのかを深く考えてみた。このコラムは、一般論ではなく、あくまで私の個人的な見解として受け止めてもらいたい。

まず挙げられるのは、今のご時世で「好きな道を志し、その道で活躍し新たな地平を生み出そうとしている」ことに、一種の憧れがあるからである。自分の仕事にある程度メドがつき始めている世代は、自分が出来なかったことをある若者の活躍に代替させる傾向にあり、その若者が藤井二冠になっているのである。

また、そつなくこなす、手際よくこなす、何とか結果を残すというのが精一杯な中で、発想力に富んだ手、他のプロ棋士もうなる一手が打てる若者に惹かれるからである。自分の持ち時間をギリギリまで使い、最も早い一手違いで相手を倒すという彼の将棋スタイルは、ハラハラさせると同時に何とも言えない華がある。

次に、藤井二冠の発言、所作等に非常に好感が持てることである。対局の始めと終わりに行う御辞儀の深さと長さ、感情を押し殺し、一言一言を選びながらの発言は、高い評価を受けている。個人的には、「僥倖（ぎょうこう）」「望外（ぼうがい）」「足枷（あしかせ）」といった一昔前の難語を駆使した発言、文章に、語彙力・表現力の高さを感じている。

最後に、師匠の杉本昌隆八段が藤井二冠と良好な師弟関係を築き上げているようにみえることだ。上司・部下の関係、教員・学生の関係等を良好に保つのは簡単なことではない。根性論や放任論ではなく、「褒めて育てよ」の操縦法で藤井二冠を立派に育てあげている杉本八段の弟子への接し方は、大学教員としての私にも、非常に勉強になっている。封建制が根強いと思われていた将棋界の師弟関係も、野沢亘伸著『師弟』（光文社）を読んでもみると、微笑ましい関係に変わっている。私も、これまで習ってきた考え方、培ってきた指導方法をひとまず整理し、厳しい一言ではなく、「褒めて育てよ」「十分に話をしていく」という方向に、本気で大きく舵をとる時期に来ていると痛感している。